

# 白鳳彫刻私考

金 森 遵

## 一

世に白鳳彫刻と呼ばれるものほどその實體の把握し得ぬものはあ

るまい。勿論、一般に白鳳時代の佛像として挙げられて居る數々の遺例を我々は知つて居る。深大寺釋迦如來像、新藥師寺香藥師像、鶴林寺觀音像、法隆寺阿彌陀三尊像（傳橘夫人念持佛）、或は又法隆寺夢達觀音像などがそれである。併し此等の諸像に就いて我々の知り得る所のものは何であらうか。それには、種々の考察がなされ得るであらうが、結局は鑑賞的な讃辭として低徊するに過ぎないのである。然も、これらの諸像は一般に白鳳様式が考へられて居る限りでは典型的なものと言はねばならない。茲に於て我々は白鳳彫刻<sup>（註一）</sup>に就ての既成概念を検討する必要にせまられてくるのである。

## 二

所謂白鳳彫刻の基準作例として挙げられるのは、御物辛亥年銘觀

音像 本誌第一一、野中寺彌勒像 本誌第六、興福寺佛頭 圖版第一一、長谷寺千佛多寶佛塔銅板 圖版第八・一二、法隆寺五重塔塑像群の五點に歸するやうである。

之等の諸像のうち、前二點は在銘像であつて、御物の觀音像は辛亥の銘があり、野中寺像には丙寅の銘が鐫られて居るので、在銘と言ふ點から言へば最も客觀的な基準性が認められるわけであるが、その年記が唯干支のみを留めて居て、具體的な年代を推知せしめる手懸りが銘文自身の中に見出されないと云ふ點で、やゝ薄弱な感があり、壬辰の銘を有する鰐淵寺の觀音像と同様に様式的觀察の補助を得なければ基準性を完うしないといふ缺點があつて、爲に此の二例は基準作例としての十分な條件を具へて居ないと考へられる。

次いで、興福寺の佛頭は近年同寺東金堂現本尊の壇下より發見されたもので、頭頂の大部分と左耳朵を失ひ、全體に多少の歪形を生じて居るが、その形狀より推して丈六如來像の頭部である事は明瞭で、更にその製法、外見の上から見ても奈良時代を降るものとは考

へられない。そして此の佛頭は臺座裏面の墨書等によつて應永十八年同堂炎上以前の舊本尊の佛頭が、焼失を免れて残つたものである事が知られ、更に遡つて、玉葉の建久三年の條に興福寺の僧徒が山田寺金堂より藥師三尊像を奪ひ出し、當時未成であつた興福寺東金堂に本尊として安置した由見えて居るのに從へば、現佛頭を以つて舊山田寺講堂本尊（天武天皇十三年開眼）のそれであつたと推定しても大過ないと考へられる。

長谷寺の千佛多寶佛塔銅板（法華說相像）はその最下段に鐫銘があつて、それによつて、僧道明が降婁漆菟の上旬に飛鳥淨御原御宇天皇の御爲に造立した事が知られる。そしてその「降婁漆菟」の字義については伴信友によつて「戊年七月」と判せられ、之が現在迄の所では妥當であると認められて居るが、その肝腎の干支が完結して居ない爲に精確な年代が認出され難かつた。それに關して一般に飛鳥淨御原御宇天皇と申上げ奉るは天武天皇の御事に限つて居る事を關聯せしめて、上記の年記を天武天皇の朱鳥元年に擬するのが定説化して居るが、實は持統天皇をも飛鳥淨御原御宇天皇と申上げ奉つた事が知られて居るので、伴信友説の限りに於ては上引の年代も實際には文武天皇第二年に當るべき事が推定される。<sup>(註二)</sup>

最後に、法隆寺五重塔初層の四面に象られて居る諸塑像は天平十九年勘記の同寺流記資財帳によれば、和銅四年に造立されたと記載されて居るもので、該資財帳は若干の點に於て記録の確實性に疑問が無いでもないが、右の記述に就いては特に疑ふべき根據もないや

うであるので、此の和銅四年説はそのまゝ、鵜呑みして差支へないと判せられる。

右の諸像の他若干の遺像がその基準性を指摘されて居るが、私としてはそれらの像に客觀的な基準性を認める事は出来ないのて茲には引用を避けた。當麻寺の彌勒佛像、法隆寺金堂四天王像、同寺彌陀三尊像（傳橋夫人念持佛）の如きそれである。<sup>(註三)</sup>

### 三

以上の如く、白鳳彫刻に見出される五點の基準作例のうち最初の二點の確實性が絶對的でないとすれば、残る三點が僅かに基準作例としての客觀性を保持して居るに過ぎない。

然もその頭初の興福寺東金堂の佛頭は文字通り不完形の頭部であつて、之を以つて全般を律する事に難點があり、長谷寺銅板はその上に象られて居る佛像の像身が過小である爲に、様式的な觀察に完全を期し得ぬ傾向にある。然も法隆寺の塑像とても基礎的觀察の資としては必ずしも完好な條件を具へて居るとは言へない。斯く見れば、白鳳彫刻の中から見出された基準作例と言ふものも實は可成り缺點のある事が知られ、従つて所謂白鳳様式の探求にもやゝ適確を缺く嫌ひがないでもない。併し、白鳳彫刻に於ける基準作例は以上の諸像を除いて他には見出されやうとは信じられない今日では、上記の諸作例に基づく他はないわけである。

興福寺の佛頭は損傷の爲に缺失部分のある以外に、外形に若干の

歪曲を生じて居るので、現在の外見をそのまゝ觀察の資とする事は避けなければならないが、<sup>(註四)</sup>一應此の佛頭の細部と全形とについて觀察を試みるべきであらう。此の佛頭の細部的特色の中で觀察の資となし得るのは眉目・口唇・耳等である。その中で眉と目は此の佛頭を最も特色づけるものであるが、眉目ともに、此の様な形狀のものを奈良時代以前の像に見出す事が出来ないで、幾分の疑念を抱かせられるが（殊に眉と目との關係位置は頗る特殊なものである）、さりとて、平安時代以降に此の様な類例を見出し得ない。然も、此の佛頭の他の部分にはその様な後代の徴據が見出されないで、却つて

第一圖 彌勒佛像

奈良 當麻寺金堂所在

その耳の如きは前行的奈良彫刻の有力な特色をなして、たとへば正倉院伎樂面中の古様のもの或は遡つて法隆寺獻納御物の伎樂面の中に、<sup>(註五)</sup>ほゞ同巧の形狀のものを見出すのを以つて見れば、此の佛頭の一斑を知る事が出来る筈である。又此の佛頭はその正面觀ではその實狀を把握し難いが、その側面觀には奈良彫刻に通ずるものを持つて居て、特に前引の伎樂面には著しく接近して居る事は看過できない所であつて、此の佛頭の様式的な位置を語る所が多いと考へられる。此の點より逆推すれば、上記の様な眉目の不整な形狀は結局飛鳥彫刻の形式主義から奈良彫刻の寫實主義へ移行する間の一時的混亂によつて生起せしめられたものと解せられ、同様な事は口唇の形狀についても言ひ得る。

斯くの如く見れば、此の佛頭に於ては飛鳥彫刻と奈良彫刻との様式的な過渡に重點があるのであつて、之を具體的な徴據に就いて示せば勿論眉目の不鮮明な手法を擧ぐべきであらうが、彫刻史的な關聯の鎖鑰としては當然その耳を中心とした側面觀を提示すべきであらう。そして此の佛頭の様式手法を更に發展させて明確になつたものは恐らく當麻寺の彌勒佛像<sup>第一圖</sup>に歸すると考へられる。勿論當麻寺像と此の佛頭との關係を直接結びつける資料は見出されないが、興福寺佛頭から當麻寺像への展開は極めて自然であつて、餘り多くの時日を要しなかつたと解される。そして當麻寺像が一層發達整頓されて藥師寺金堂の藥師佛像<sup>圖版第九</sup>が生れる事も極めて自然な經過であらう。但し此の場合、興福寺佛頭と藥師寺金堂三尊像との時間的

關係から機械的に當麻寺彌勒佛像の年代的位位置を判斷する事は不可能であり、輕卒でもある。

長谷寺の千佛多寶佛塔銅板にはその板面に都合四具の三尊佛或は五尊佛像が浮彫として現はされて居るが、前にも述べた様にその像容が極めて小形である爲、前の興福寺佛頭と同一面に置いて考察する事は出來ず、勿論細部に互る觀察も必ずしも適當ではない。従つて、此の像に就ては細部よりは寧ろ全形を觀察の資とすべきである。その四具の佛土の各尊はその尊名を審かにする事は勿論不可能であるが、各尊ともやゝ硬直した姿態の中に飛鳥様式を去る事の遠くないのが確認されるが、頭部は丸く膨らんで、世に言ふ白鳳金銅佛——たとへば新藥師寺香藥師像の如き——のそれと著しく接近した風貌を示して居て、此の銅板像との間に一抹の連鎖を暗示して居る。その一方、此の像の衣文線は小像であるにも拘らず、飛鳥彫刻的な襷皺に可成り豊かな肉附をなし、肉身に見られる微かな抑揚と共に小形金銅佛像としての長谷寺銅板諸像の様式手法上の特色を明示し、飛鳥末期から奈良初期に互つて多數造立された金銅佛像群の解明への重要な示唆をなすものである。

法隆寺五重塔の塑像は國寶に指定されたものゝみでも約七十軀の多數に及んで居るが、その中で様式的な觀察の素材として完好なものは東面の文殊菩薩像及び南面の彌勒佛像<sup>挿圖第二</sup>の二軀である。これらの諸像は長谷寺銅板より十餘年を隔てたに過ぎないが、最早や前像の様な生硬さは無く、適度の寫實的表現を飛鳥時代以降の傳統で

ある形式的な整頓によつて包み、やゝ面長の豐頬と弱い抑揚を加へた肉附とやゝ間遠はなゆるい衣文線とを像様の骨子として居る。そして之等のものは飛鳥彫刻に於ては未だ明確に見出されなかつた所であつた。なほ此の様な事は前像が金銅造であるのに對して、此の諸像が塑造と言ふ素材の差違によるかとも考へられぬでもないが、當時の金銅像一般——殊に長谷寺銅板——が臘型によつて居る事を思へば、此の素材上の問題は解消する筈である。斯くの如く、此の法隆寺塔婆の塑像には飛鳥様式からの離脱が極めて明瞭になつて來て居るが、此の諸像が飛鳥様式から殆ど完全に去つて、藥師寺金堂像の如き完全な奈良様式に極めて近接して居るのに反して、飛鳥彫刻との關聯をなほ留めて居るのが法隆寺食堂の諸像である。

法隆寺食堂は藥師如來像<sup>挿圖第三</sup>を本尊として梵天像、帝釋天像<sup>本誌第一</sup>、<sup>二號</sup>四天王像の計七軀の塑像が收められて居る。此の諸像はその造

立年次を知るべき客觀的な端緒に恵まれて居ないが、塔婆塑像との間に興味ある關係が知られる。その中本尊藥師佛像是後補が可成り甚しい爲部分的には不適當な點もあるが、形相、素材、像高の諸點が孰れも塔婆の彌勒佛像と一致して居るので比較に好都合である。塔婆彌勒像は小形乍ら當麻寺彌勒像の衣鉢をつぐものであつて（正確には此の兩像の前後關係を窮め得ないが）、形式の上にも隋朝佛乃至唐朝佛の流れを掬むものであるのに反して、食堂彌勒像は形相の上では法隆寺金堂釋迦像の様な北魏系佛像のそれをうけて居て、形式の上では正に全然別系のものである事が知られるが、更に此の



形式上の二流變轉の時間的關係と表裏をなして、様式の上でも食堂像には飛鳥佛に近い硬さが残つて居て、その殊に顯著なのは衣文線に見出され、之を塔婆彌勒像のそれに比較すれば此の兩像の様式的な成熟の前後關係を知る事が出来、更にそれが直ちに此の兩像の造立年代の前後を示して居ると解される。即ち食堂塑像は塔婆塑像より年代的にやゝ遡るものと判せられるのであるが、その間に何程の時間的開きがあるかに就いては量るべき手段が見出されない。併し、その形式の古様(註七)にのみ拘泥して當麻寺彌勒像を遡るものと見る事の危険さは、此の一具中の諸像を観察する事によつて諒解される筈である。脇侍諸像の中で、觀察の上好都合なのは梵天帝釋天の二像で、此の兩像は一見して初期唐朝菩薩像の様式を攝取して造立さ

第二圖 彌勒佛像

法隆寺五重塔所在

れた事が知られるので、此の一具の諸像が白鳳時代の中葉を遡らない事は多言を要しないと思ふ。然も此の二天像は寫實的な手法に於ては塔婆諸像よりは遅れて居て形式的な生硬さを残して居る點に、奈良彫刻に於ける大陸の様式の波及が此の像に於ては未だ稀薄であつたと知る事が出来る。之に比すれば塔婆諸像は大陸的手法を可成りよく咀嚼して居ると言ふ事が出来やう。

最後に、藥師寺金堂の藥師三尊像は現地の藥師寺が今日の建築史的定説として平城遷都後に新地に於ける新造營と解されて居るのに從へば、當然養老頃に造鑄されたと判せられるので、此の像は所謂白鳳彫刻には加へ得ないが、白鳳時代に膚接しての造立である以上、此の三尊像は白鳳彫刻の末期的様式を考へる上に逸する事が出来ないものである。殊には、白鳳彫刻として最終的遺例である法隆寺塔婆像が小形佛像であるのを補ふには必須のものであり、興福寺佛頭及び當麻寺彌勒像との關聯に於て極めて重要な位置を占めるものである。そして此の像に於ては飛鳥時代以來の形式主義が此の時代の中頃より勃興した寫實主義との間に適度の折衷を得て、一種の理想主義的な効果をあげて居るのである。その徴候を整頓された衣文線やなだらかな肉身に判然と見出し得られ、之によつて上掲諸作例が様式的に到達すべきであつた目標を示して居るわけである。

四

斯くて、白鳳彫刻に於ては基準作例による限り、興福寺佛頭↓長

谷寺千佛多寶佛塔↓法隆寺塔婆塑像↓藥師寺金堂藥師三尊像と言ふ發展段階を辿つた事が推察され、それに當麻寺彌勒像と法隆寺食堂塑像を補助的作例として加へる時には、白鳳彫刻についての可成り明確な概念を得る事が出来る。

即ち興福寺佛頭に於て見られた寫實主義的意圖は、當時なほ強力に残存して居たと推知される飛鳥彫刻の餘風との間に一種の様式的混亂を惹起せしめて、やゝ不徹底な象形上の破綻をさへ生じたやうであつたが、當麻寺彌勒佛像に於てさうした混沌狀態が收拾されて様式的な安定を得た事が知られる。當麻寺の彌勒像は前述の様に具體的な造立年次を知る事が出来ないが、その様式的な成熟狀態から

第三圖 藥師如來像

法隆寺食堂所在

判しても、藥師寺金堂像に意外に接近した頃の造立ではないかとも想像され、少くとも長谷寺銅板像よりは後の造立と考へられる。長谷寺銅板像の形相の古様からしても、此の頃——即ち文武天皇二年——には様式的な技法（語を換へて言へば寫實的な手法）は一般には發達程度に於て飛鳥彫刻の域を去る事の寡少であつた事が察せられる。従つて、上掲の基準作例に關する限り、白鳳彫刻として明確な形を成して來たのは長谷寺銅板以後の事の様に考へられ、そして又恐らくは當麻寺彌勒像の如きものがその頃の様式の具體的な作例として舉げられるわけであらう。法隆寺食堂及び塔婆の塑像群にはそれから藥師寺三尊像へ繼ぐ様式的な標石としての美術史的位置が與へられるが、就中、食堂の諸像は奈良彫刻に對する初唐の彫刻手法の影響を示す端的な例證となる點は特に逸せられてはならない事である。

## 五

併し、前節で見る事の出來た白鳳彫刻の諸作例によつて我々の知り得る所は所謂白鳳時代の後半期に過ぎないのであつて、更に精確に言へば興福寺佛頭の天武天皇第十三年から法隆寺塔婆塑像の和銅四年に至る僅か二十六年間の消息を示して居るのである。従つてそれに先立つ所の約四十年の前半期に就いては以上の基準作例によつては何物も知る所がないわけである。

茲に於て再び想起されるのは辛亥の銘を有する御物の觀音像と丙

寅の銘を有する野中寺の彌勒像とである。此の兩像はそれ／＼確實な鑄銘を有するにも拘らず、その銘記の中にその干支の具體的に該當すべき年代を推知せしめる字句を缺く爲に、在銘像乍ら基準作例として擧げる事を保留したのであるが、改めて検討を加ふべき必要があるやうに思はれる。

此の兩像の中、野中寺彌勒像の示す外見上の特色は大括して言へば、飛鳥様式より轉化したものと考へられる。その最も明瞭に見られるのは衣文の皺曲であつて、形式的な線を形成しては居るものの、飛鳥彫刻に一般に見られる鋸齒狀をなす規則的な繰り返へしをなさないで可成り自由な（勿論生硬さを伴つては居るが）變化を作り出して居るのが知られる。又面相にしても、目や唇の形狀にはやや寫實的な意圖が見られ、頬の肉取りも飛鳥彫刻のそれに一段と實人らしさを加へて居るやうである。併し他方、裳の飾り文様や臺座反花の文様などには飛鳥時代以來の技巧がそのまゝ残つて居るし、全體の象形も飛鳥彫刻と全然同調にあると言つてよい。斯くの如く、此の像には飛鳥彫刻からの發展過程が著しく見られ、然も、その様式的な發展がまだ唐朝様の攝取に迄は進んで居ないと言ふ點で此の像の様式的な位置を物語つて居るわけであつて、その造立が白鳳時代の前半期にあるべき事が推斷せられる。従つて、此の銘文に言ふ「丙寅」が天智天皇第五年に當ると言ふ事は妥當な推定であらう。

又御物觀音像はその外形が一見して夢殿觀音像のそれと同一であ

る事から、その造立年代が飛鳥時代か或はそれに近いと言ふ事は容易に察知されるが、此の像の銘記に見ゆる「辛亥」と言ふ干支に就ては、之を明確な年次として完結せしめる事は銘文のみによつては不可能であつて、從來から此の干支については二様の解釋が行はれて居る。即ち、崇峻天皇第四年とする説と孝德天皇の白雉二年と見る説とである。此の觀音像の様式を法隆寺金堂の釋迦像の脇侍などに比較すれば、一般に勁直な表現と銳利な衣文法とを失つて居て、平明な趣が見られるので、飛鳥盛期の様式より一步解脫の傾向にある様に考へられる。此の考へ方に従へば白雉二年の造立と考へるのが至當であらう。併し様式發展は恒にその様な經路を辿るものとのみは考へられず、加之、飛鳥彫刻の實體そのものが必ずしも闡明し盡されて居ない現在では、法隆寺金堂の釋迦三尊と言ふ唯一の基準からその様式展開を考へることは頗る危険であると言はねばならないから、此の御物觀音像に就ても斷定は避けねばならないが、此の像の衣文の平明な曲線には熟練による一種の心易さが見られ、もし崇峻天皇朝の造立なれば技巧の未熟に當然伴ふべき生硬さの見られない事は、白雉二年説に有利であるやうに思はれる。

たとへ、御物觀音像を白鳳彫刻に加へ得ぬにしろ、野中寺彌勒像と言ふ一例のみによつても、白鳳時代前半期の様式的特色は一應推察し得られるのであつて、恐らくは、飛鳥彫刻の様式的制壓下にあつて、唯多少蟬脫の傾向にあつたものゝ様であつて、野中寺像の如きは新氣運を最もよく示すものであつたと考へられるが、一般には

飛鳥彫刻の亞流的な特色を保持して居たと想像される。

## 六

孰れにせよ、白鳳時代の前半期を一乃至二の小金銅佛像によつて様式的に説明し盡す事は到底不可能であつて、少くとも野中寺彌勒像の示す様式的特色は白鳳前期の一點景であるに過ぎなくて、實際にはなほ別途の経過があり得たやうに考へられる。勿論、此の場合、その様な事は單なる憶測であつて、具體的に客觀性を具へた資料があるわけではないが、之に對して、一般に飛鳥彫刻と考へられて居る所のものゝうちに何等かの證據がある様に考へられる。此の點は結論的に言へば、實は飛鳥彫刻と奈良彫刻との過渡を解明する有力な契機をなすものであつて、從つて、自ら獨立的論題をなして居るが、此の問題は又當然白鳳彫刻に大なる關係を有する事であるので、茲に簡單に提題的に言及して置く。

廣く飛鳥彫刻として考へられて居る多くの彫刻があるが、それらの中で絶對的な見地から飛鳥彫刻としての資格を保持するのは法隆寺金堂釋迦三尊像のみであつて、此像は銘記によつて推古天皇三十一年の造立に成ると判せられ、飛鳥彫刻に於て殆ど唯一の基準作例であつて、自餘の諸多の遺像は客觀的な基準性が稀薄であるか皆無であるかの實狀にある。此の釋迦三尊像と並んで法隆寺金堂に安置され、同様に光背裏面に鐫銘を有する藥師如來も、一見しては殆ど同巧の様式を具へて居るにも拘らず、その様式手法自らに既に若干

の疑念が生じ得る上に、客觀性を主張すべき銘文にも文體、書體の双方の點から可成り決定的な疑義が提出されて居て、その銘文に言ふが如き、推古天皇第十五年造立のものとは考へ難く、寧ろそれより相當に降る頃の造立と見るべきものゝ様に考へられる。之に就て結論的に私見を茲に記せば、既に一二の機會に於て表明した事ではあるが、天智天皇第九年の法隆寺炎上の後に再興造顯されたものと考へる次第である。

尤も法隆寺金堂の現藥師像がたとへ復興と言ふ特殊事情のもとに造立されたにせよ、その現在見るがまゝの様式を以つて直ちに無條件に天智天皇第九年頃の様式と見る事は危険であるが、もし銘文に記す如き造立事情を事實として、此の像を推古天皇第十五年以後の鑄成とすれば、補造の機會は天智天皇第九年の伽藍回祿の再興の他にはないのであつて、前程に錯誤がなければ此の推定は充分妥當する筈であるし、その前程をなす像の様式及び銘記の點は疑念の頗る濃厚なものである。

更に、之を白鳳彫刻について見ても、法隆寺食堂の藥師如來像は前にも指摘した様に、その外形は金堂釋迦像、或は金堂藥師像と同巧の北魏風の服制をなして居り、様式手法の上でも通常白鳳後期の一般的特色として擧げられて居るものとは隔りがあつて、侍立する他の六像を缺けば、或はその推定造立年代にも現在での判斷に幾分の變動を生ぜしめて居たかも知れないのである。<sup>(註八)</sup>此の故に此の頃にあつては一見古様に屬する形式が意外に後れて行はれて居た事

が知られ、従つて金堂藥師像の如き形式乃至様式の所謂白鳳時代の後半期に於ける妥當性は一概に否定され得ない次第である。又、此のやうな経過を基礎にして廣義の飛鳥彫刻を見る時には、なほ若干の類例に接し得られ、その隨一のものとして法輪寺の藥師如來像が見出される。そして此の像も一應は北魏佛像風の外形を見せては居るが、實際には法隆寺金堂藥師像と全然同軌のものである事が容易に認められる。

此の様にして、廣義の飛鳥彫刻と言はれるもの、中にも白鳳彫刻と認むべきものが混入して居る事が判明するが、それらのものが形式の上では一應飛鳥彫刻と同軌の特色を具へて居るのは注目しに値する事で、引いては上掲諸像の様に明瞭な觀察點を有しない諸像の中にも實質的には飛鳥時代を降るものがある様に考へられる。殊に百濟觀音像や中宮寺彌勒菩薩像などの如き所謂隋朝様に屬する諸像は一般に飛鳥彫刻とされてゐ乍ら、その實、何等然るべき具體的な證據を有しないので、實際の造立年代に就ては疑問の多いものであるが、例へば法輪寺の觀音像（圖版第一〇）が、該寺の本尊である前引の藥師佛像と形式的には對蹠的な隋朝風に據り乍ら、實質的には全然同巧の様式手法を示して居る事によつて、その實年代が白鳳後期にあるべき事が判せられるやうに、上掲諸作例も或はその實年代が所謂白鳳時代に當る事は十分ありうる事で、その可能性は寧ろ頗る濃厚である。

従つて此の様な觀察に基づけば、飛鳥様式を具へて見える遺像の

中にも實際には白鳳時代に入つてから造られたものも少くないやうに考へられ、少くとも白鳳前期にはさうした種類の作例によつて内容づくられて居たとすべき蓋然性の多い事が注意されるのであつて、此の飛鳥彫刻との關係を究明する事が出来れば、白鳳彫刻（少くともその前半期）の様式的性格を明確ならしめるに與つて力あるものとなるであらう。

## 七

扱、上來見る事を得た所要を要約すれば、所謂白鳳彫刻は大凡その半頃を境として、その後と前とは様式的特色が可成り異つて居て、前半期は飛鳥彫刻の情勢に過ぎないで、極めて消極的な性質のものであつた事が知られる。それに對して、後半期の彫刻は興福寺の佛頭の如きものを契機として積極的な發展の傾向を示し、漸次飛鳥彫刻の餘風を清拂して獨自の様式を示す様になつたものである。そして數多くの後期彫刻像の中で最も明確な様式的特色を示すものは當麻寺の彌勒佛像であつて、もし白鳳様式を抽出するとすれば、此の像のそれは正に典型的なものと言ふ事が出来やう。そして白鳳彫刻を考へるには當然此の當麻寺像を中心とすべきであつて、それに法隆寺食堂脇侍菩薩像の如きものを參酌する事が出来れば白鳳彫刻に就いてはほぼ正鵠を得る事が出来やう。

頭初に擧げた如き、此の時代の典型的彫像と考へられて居るものが、果して上記の如き線に沿ふか否かは、さして微細な觀察を須ひ

ずとも自明であらう。勿論私は白鳳彫刻の様式的な潮流を唯一つに歸せしめやうとするものではなく、従つて上に挙げた線はその大綱を示すもので、當麻寺像と法隆寺食堂像とが必ずしも同一延長線上にあると主張するでもないのであつて、従つて之を骨格としてその肉たり皮たるものが有るべき事は當然である。併し頭初の諸像の中で、<sup>(註九)</sup>鶴林寺觀音像或は法隆寺夢違觀音像の如き様式をその間から抽出する事は頗る困難であり、在銘像乍ら鰐淵寺觀音像の如きもの僻邊の存在である事を思へば、無條件に白鳳様式に歸する事は早計と考へられる。恐らくこれらのものはその後の發展に屬するものであらう。

前段に當麻寺彌勒佛像を擧げて所謂白鳳彫刻の典型と見たのであるが、決して此の像を以つて様式的に完成したものと云ふのではなく、既述のやうに此の像の様式的な成熟とても藥師寺金堂藥師像の完璧を得て初めて様式的な結實を見るわけであるので、當麻寺像のみを以つてしては結局半途に留まるものと言ふべきであつて、飽く迄その後の發展を要するものである。

此の故に所謂白鳳彫刻は様式的には不徹底不完全なものであつて、決して完結した様式ではない事が知られる。然も藥師寺金堂像が白鳳彫刻として數へ得られぬ事は細説を要せぬ所であつて、結局白鳳彫刻は藥師寺金堂像を生むべき前程に過ぎなかつたとも言ひ得られ、従つて様式的には決して獨立的な位置を主張し得ないで、少くともその後半期は當然奈良彫刻へ攝收されるべき事は自明であらう。

以上の如く見れば、此の時代の彫刻は畢竟様式的な過渡にすぎなくて、殊にその前半期には全然存在意義がない事となつて、様式史的には極めて低い價値を與へ得るに止まるわけであるが、然もその後半期は約三十年程の短い期間に興福寺佛頭に始まつて藥師寺金堂三尊を導き出す迄に頗る目覺しい様式的展開があつた事を思へば、所謂白鳳彫刻は過渡期とは言へ決して蔑視すべきではあるまい。翻つて、その無爲なるが如き前半期を考ふるに、此の間は丁度大化改新の時代に當つて、御英邁に渡らせ給ふた天智天皇御親政の下に新しき政治力を結集して、旺盛なる國力を培養するに寧日なかつた時であるので、一見沈滞の如き外見の中に文化的にも活力が十分充實して、それが後半期に至つて具體的な活動となつて急速な發展を遂げたものであらう。それにしても天智天皇の御願であつた舊大安寺本尊の乾漆の丈六彌勒佛像が今にその姿を傳へ得なかつたのは白鳳彫刻にとつて大不幸であつたと思ふ。

註一 茲で言ふ白鳳時代と言ふのは大化改新以後、和銅の平城遷都迄を指すものとして置く。

註二 嘗つて考古學雜誌第二十七卷第十號誌上に於て此の銅板の造立年次に就て論じ、伴信友の降婁説に基づいて朱鳥元年説の不當なるを明かにして實年代を文武天皇二年或は元明天皇和銅三年の孰れかに擬定すべき事結論したのであるが、その後故足立博士の御教示により文武天皇第三年が適當する事を確め得た。

註三 (一) 當麻寺彌勒佛像に就いては從來佛教全書本諸寺緣起集に基づいて天武天皇第九年造立説が有力であつたが、之は該文獻の誤謬によるものであつて問題とならない。又他方僧聖聰の西譽抄に引く古記なるものに従つて天武天皇第十三年説も



藥  
師  
如  
來  
像

奈  
良  
法  
輪  
寺  
藏



佛頭  
側面  
(金堂發見)

奈良  
興福寺藏

同

正面

同

同









日光菩薩像（藥師三尊ノ内）

奈良 藥師寺藏



月光菩薩像  
(藥師三尊ノ内)

奈良 藥師寺藏



提唱されたが之は所謂古記の原典を明かにしない上にそれが平安時代以降の編記になると言ふ點で確實性薄く、従つて兩説共に認め難い状態にある爲、此の當麻寺像の實年代に就ては決定的な考察を導き得ない。

(ロ) 法隆寺四天王像にはその光背裏面に山口費大口以下の人名を刻入して居るが、此の山口費大口が日本書紀白雉二年に勅を奉じて千體佛を作つたと見ゆる所から、此の四天王像を白雉二年頃の造立と見て、白鳳彫刻の中へ數へ様とする説が多いが、たとへ白雉二年の記録にその名が見えるからと言つて、彼の名の記された佛像を白雉二年頃の製作とする事は輕率に過ぎ當時もし老境にあつたとすれば實際には飛鳥時代にも充分活躍し得るのであるから、單に書紀の記事のみによつて、該四天王像を白鳳時代の造立とする事は慎しむべきである。

(ハ) 法隆寺で橘夫人念持佛と傳へられる厨子入の阿彌陀三尊像は、謂ふ所の橘夫人に就いて二説あつて歸一しないが、孰れにせよ橘夫人説は鎌倉時代に入つて突然出て來た傳説であつて、従つてその確實性は明瞭でなく、それによつて此の三尊像の造立年代を探る事は出来ない。

註四 現在此の佛頭は奈良帝室博物館に保管されて居るが、その安置位置の高さは普通人の眼の高さを多くは超え得ない爲、一般佛像とその高さを異にし、従つて、視點の相違から來る容貌の外見は同一狀況にないわけであつて、その點やゝ觀察上の不合理のある事も一應考慮に入れなければならない。

註五 此の佛頭の耳朶が所謂紐耳形式に近くあつて、之は稀少の例外を除いては奈良時代の前半期に多い事も考慮に入れるべきであらう。

註六 食堂の塑像群のうちで本尊藥師佛像のみは他の六軀とは別のものと言ふ説もあるが、積極的な根據の見出されぬ限り、すべて一具のものと見て差支へないと思はれる。

註七 なほ此の食堂藥師像の形相は白鳳時代の後期に於ける北魏佛形式の殘存を語る有力な資料であつて、飛鳥彫刻を見る上に逸せられない事である。

註八 法隆寺食堂諸像の中で、本尊の北魏風なのに反して、他の六像が唐朝風である事は一具のものとしては不審と言へば言へやうが過渡期の消化不足の頃ではさうした形式的な混亂は當然あるべきであり、他方さうした形式的な不一致にも拘らず、様式手法の上では此の七像の間に矛盾はないのであるから、當然此の七像は一具の

ものとして造立されたと推定される。

註九 頭初に記した諸像の中で、深大寺の釋迦如來像は新藥師寺の香藥師像と同巧の作行と見え、一應は長谷寺の銅板像を前後する様式と見受けられるが、細部的には様式的に釋然としない點があるので、細説は避けるが、茲では白鳳彫刻に加算する事を控へて置く。